

研究ノート

トルコのギョクチェン家所蔵の七宝花瓶に関して

ヤマンラール 水野 美奈子*

Cloisonné Vase of Meiji Period in the collection of Gökçen Family in Turkey

Minako MIZUNO YAMANLAR*

Kozui Otani had managed the promotion industry of silk fabric and dying at Bursa in Turkey during 1929-36. He has presented a cloisonné vase based on ceramic to his Turkish business partner Saffet Beyzade Mehmet Memduh Bey. The vase decorated with peony and lotus flower has inscription 'produced by Takeuchi' at the bottom. The paper tries to explain that the vase would be produced by one of cloisonné masters of early Meiji period named Takeuchi Chubei, by technique, design and inscription.

序

平成19年～21年の3年間、筆者は本研究所の指定研究「世界の中の日本、日本の中の世界：イスタンブール旧総領事館と文明開化思潮」において、伝説的にしか語られることのなかった大谷光瑞師のトルコ共和国ブルサ市における殖産事業共同経営者の子孫ギョクチェン家の存在を明らかにし、そこに保存されている資料を閲覧する機会を得た。その成果の一端は、日本外務省の「2010年、トルコにおける日本年」の企画の一つとして、ブルサ市立博物館において展示公開された。大谷光瑞師のトルコでの殖産事業は、短期間であったこともあり、日本とトルコの交流史研究において、これまで取り上げられることはなかったが、共和国建国当時の殖産に貢献し、初代大統領となったムスタファ・ケマル・アタチュルク時代の日本とトルコの関係史において重要な意義を有している。指定研究では、新資料の研究や展覧会開催事業に時間を費やし、多くの研究課題が残された。

平成23年度国際社会文化研究所の個人研究「トルコのギョクチェン家所蔵の明治期の七宝と陶磁器」は上記指定研究から残された課題の一つに関する研究である。

後に詳しく述べるように、大谷光瑞師は1929年（昭和4年）トルコ共和国のブルサ市で絹織物工場を開設し、名実ともにブルサの名士であったサーフェト・ベイザーデ・メフメト・メモドゥフ・ベイ（Saffet Beyzade Mehmet Memduh Bey）（以下、メモドゥフ・ベイと略す）と工場を共同経営した。本小論の七宝花瓶は大谷光瑞師がギョクチェン家へ贈呈した品目の一つである。大谷光瑞師からの贈呈品と思われるものは、現在ほとんどがギョクチェン（Gökçen）家に保管されている

* 龍谷大学国際文化学部

が、その筆頭に挙げられるのが当該七宝花瓶である（高さ約 50 cm）。（図 1）個人研究の研究課題には、陶磁器も含まれている。2 点の陶磁器の内 1 点はギョクチェン家が保管する明代の赤絵を模した輸出向けの陶磁器で、他はギョクチェン家親族が所蔵している白地花鳥文花瓶であるが、今回は調査の機会が得られなかった。ギョクチェン家所蔵の赤絵を模した輸出陶磁器は明治期以降に製作された日本の輸出向け製品と考えられるが、研究期間に比較対象となる作品などとの考証ができなかった。したがって本報告では七宝花瓶のみを対象とし、私見を述べるとどめたい。

大谷光瑞師のトルコでの動向

大谷光瑞師は、4 回トルコを訪問している。第 1 回目の訪問は 1901 年（明治 34 年）で、中央アジアへの探検隊派遣の前年にあたる。これは考古学的関心からの訪問であったと考えられるが、まだ日本とトルコに公式な国交が結ばれる前であり、事務的問題から目的を達せず、10 日ほどのものであった¹⁾。2 回目と 3 回目は 1926 年（大正 15 年）2 月に出発したトルコ・欧州視察旅行の期間においてであった。この旅行中、大谷光瑞師は、4 月 11 日から 5 月 13 日までと、11 月 3 日から 11 月 24 日までの 2 回トルコに滞在している。旅行の前半に行った第 2 回目のトルコ訪問は、大阪商業会議所の依頼を受けてのトルコ物産調査、農業環境の視察と自身のトルコでの農業開発事業の調査が主な目的であった²⁾。3 回目は、新生トルコ共和国の首都アンカラとアナトリア西部のブルサ市での自身の殖産事業計画の実施に向けられた。大谷光瑞師帰国後も上村辰巳や廣瀬承などの大谷門下生をトルコに残し、アンカラやブルサの事業地の租借交渉にあたらせた³⁾。事実 1927 年（昭和 2 年）2 月 23 日には、大統領アタチュルクのアヒマスッド農園における共同経営契約が成立している⁴⁾。4 回目は 1928 年（昭和 3 年）12 月 18 日から 1929 年（昭和 4 年）2 月 3 日にかけての訪問であった。ブルサでの絹織物工場開設に合わせての訪問だったと考えられるが、工事が大幅に遅れるなどして、工場の竣工には及ばず、工場の共同経営者メモドゥフ・ベイを自宅に訪問し、ブルサでの大規模な蚕産業の着手を進めた。ブルサの絹織物工場「日土織物合併会社」（トルコでの名称は Türk Japon Dokuma ve Boya Fabrikası＝トルコ・日本織物染色工場）が落成したのは 1929 年 8 月 4 日であったが、大谷光瑞師はその盛大な落成式に出席していない。

大谷光瑞師とメモドゥフ・ベイ

本研究ノートの題目であるギョクチェン家所蔵の七宝花瓶が、大谷光瑞師からギョクチェン家への贈答品であることは、現ギョクチェン家当主からの聞き取り調査で明らかであるが、七宝花瓶はかなり芸術性の高いものであり、その伝来には共に共同経営者であった大谷光瑞師とメモドゥフ・ベイの人となりも看過できない。



図 1

大谷光瑞師（1876-1948）が西本願寺宗主として仏教学はもとより、考古学、地理学、地質学その他多岐の学術分野に精通した学識者であること、またアジア全域の発展を目指した殖産事業家として高名であったことは、改めて言うまでもない。大谷光瑞師のブルサでの絹織物工場の共同経営者であったメモドゥフ・ベイ（1877-1932）は、イスラームの開祖預言者ムハンマドの子孫であり、ブルサにおいてイスラームの神秘主義教団の大きな宗派であるナクシベンディー神秘主義教団を統率する家系の長であった。またオスマン帝国末期に高等教育を受け、統一進歩党のブルサ選出の帝国議会議員として政界に進出した。共和国成立後はブルサ商工会議所開設者オスマン・フェヴズィ・エフエンディ（Osman Fevzi Efendi）の娘婿となり、企業家としても著名であった⁵⁾。

メモドゥフ・ベイは大谷光瑞師より1歳年下であるが、両者の生涯の活動には共通点も少なくない。二人がいかにして知り合ったかについて文献的資料はなく、ギョクチェン家にもこの点に関する伝承は残っていない。

大谷光瑞師は第2回目のトルコ訪問では、1926年5月7日から9日まで3日間ブルサに滞在し、農務局、農学校、業蚕学校、牧畜場などを見学した。第3回目は1926年11月8日から19日まで11日間滞在し、自身の農業事業をブルサ中心に行うこと、農業主任に秘書の上村辰巳、業務に門下生の塩尻彦一、須山昭を従事させること、1927年には増員予定を検討するなどかなり具体的な事業計画を立てているが、絹織物会社設立に関する動向は見られないし、またこの間メモドゥフ・ベイと接触した記述も大谷光瑞師の旅行記「地中海遊記」には見られない。

4回目の旅行を記した「鵬遊記」において、初めて共同経営者のメモドゥフ・ベイに触れている⁶⁾。1929年1月26日、一族の経営する名湯 チェキルゲ・ハمام（チェキルゲ公衆浴場）で入浴後、月明かりに映える雪道を車でメモドゥフ・ベイ邸を訪れる様が記されている。メモドゥフ・ベイを「年齢五十余にして才気澀剣の紳士なり」と評している。この文面は、おそらく大谷光瑞師が初めてメモドゥフ・ベイに会った際の印象と受け止めることができる。メモドゥフ・ベイ邸にてトルコ料理を食し、「同氏の云う所によれば、トルコ料理は決して品種少なからず。三十日の滞在は決して一回だも重複せる食を饗せずと云う。同氏の庖厨は頗る佳なり。」と絶賛している。食通として知られる大谷光瑞師の印象が見られるが、他方、トルコの伝統的な接待の習慣から考えると、新たに知り合った人物を食事に招待するのは常であり、本格的なトルコ料理をメモドゥフ邸で初めて食した感想も、この会見が両者にとって、初めてのものであったことを裏づける。先に記したようにこの4回目のトルコ訪問は絹織物工場の落成に合わせたものと考えられるが、1928年末の落成予定が大幅に遅れ、翌年の4月に予定されたため（実際には8月に竣工）、ブルサ訪問での共同出資者であり共同経営者であったメモドゥフ・ベイとの初会合は一つの収穫であったと言える。

ギョクチェン家に残された断片的な経営関係資料は、ブルサの事業が大谷光瑞師の代理人である上村辰巳に全面的に任されていたことを示しており、出資者であるメモドゥフ・ベイと大谷光瑞師が絹織物工場準備期間には、まだ面識がなかったことも不思議ではない。

日本とトルコの関係は、1873年4月に岩倉使節団の福地源一郎と島地黙雷のイスタンブル訪問以降、非公式に始まるが、1923年トルコ共和国が建国すると日本政府は経済、政治、軍事など幅広くトルコとの関係構築に乗り出した。大谷光瑞師は大正天皇の義兄として知られており、アンカラやブルサでの殖産事業には、大統領アタチュルクをはじめ各界名士が協力を惜しなかった。

1929年1月21日病氣療養後アンカラを訪れた大谷光瑞師はイシュ銀行頭取のジェラル・バヤル(Celal Bayar)に面会している⁷⁾。彼はブルサ出身で後に第3代大統領になった人物であるが、大統領アタチュルクの秘書官長のテウフィック・ベイと共に、数日後に予定されていた大谷光瑞師のブルサ訪問に際し、メモドゥフ・ベイの所有するススル農場やイシュ銀行傘下の絹織物工場の視察許可を取り付けるなどしている。大統領アタチュルクは新生トルコ共和国発展に農業開発が必須であることを提唱し、自らアンカラに農園を経営し、その一部を大谷光瑞師と共同経営したが、彼はまたブルサの肥沃な土壌に注目し、頻繁にブルサを訪問している。アタチュルクと大谷光瑞師が直接会見の機会を有したか否かは不明である。大谷光瑞師自身の旅行記や上村辰巳の旅行記にそのような記述はないが、大谷光瑞師のトルコでの事業が新生トルコ共和国の重要人物達によって援助されていたことは事実である。

このような事業の背景を考慮すると、大谷光瑞師からメモドゥフ・ベイへの贈答品の質の高さは当然予想される。大谷光瑞師からの贈呈品として大型七宝花瓶1器、大型陶磁器2器のほかに、ギョクチェン家には‘絹の女神’として伝えられている京人形、日本画掛け軸、墨などがあるが、中でも七宝の大型花瓶はそれらの中で、最も高価で良質であると考えられる。なおメモドゥフ・ベイからも大谷光瑞師に贈答品が送られたと考えられるが、それに関してはブルサ側に資料がなく不明である。当時の海外への贈答品は明治以降の日本の美術工芸品の状況を知る貴重な資料であり、本稿で取り上げる七宝花瓶も海外に残された日本美術の秀作の一例であると考えられる。

この花瓶がメモドゥフ・ベイに、いつ進呈されたか記録にないが、現在のギョクチェン家当メモドゥフ・ギョクチェン氏と令嬢シュキューフェ・ギョクチェン氏との聞き取り調査では、‘絹の女神’と言い伝えられてきている京人形と共に、大谷光瑞師から贈呈された家宝とされ、現当主の母親からの言い伝えからみて大谷光瑞師から直接進呈された可能性が高い。

七宝大型花瓶

この花瓶は、白鼠色の釉薬が花瓶の内側と高台及び底を覆っているため、陶磁器のような印象を受けるが、胴部の間取りの区切りの線や口縁などにかなり太めの金属線が見え、また間取りの中には、後で述べるように半透明な色調であり、陶胎七宝であることが分かる。

まず、水平に長く反った口縁部の下には2本の金属線が盛り上がりを残しながら平行に植えられ、その平行線の中は白、鶯色、紺、臙脂に水色の水玉模様からなるジグザグの山形文様の帯紋を呈している。水玉はかなり盛り上がっている。その下から丸く張り出した肩、及び二つの間取りの間は、白い小菊の花文と灰色の地に臙脂の魚子文で充填されている。小菊の細い花卉や黄色の小さな芯も、やはり盛りあがっている。(図2)

胴部を大きく覆う二つの間取りの中には、2種類の花が描かれている。一つは黄色地に牡丹と生垣が描かれ、牡丹の花は濃い臙脂から淡いピンクの色調が縦筋状に花卉の先端に向けて施されている。一方牡丹の葉は、鶯色と灰色のぼかしで描写されている。それは水墨画の溜込を思わせる技法である。生垣は間取りの右下に牡丹の根元を覆うように配されている。背景は透明感のある鮮やかなクリーム色に近い黄色である。(図1、図3) もう一つの間取りの中は、蓮の池を題材としている。ピンクの開花した蓮の花、蕾、蓮の葉が池の水とともに区画を覆っている。蓮の葉は黒色も使用され、ここにも水墨画的な溜込風の技法が用いられている。背景は淡い白に近い灰色に蓮のピン

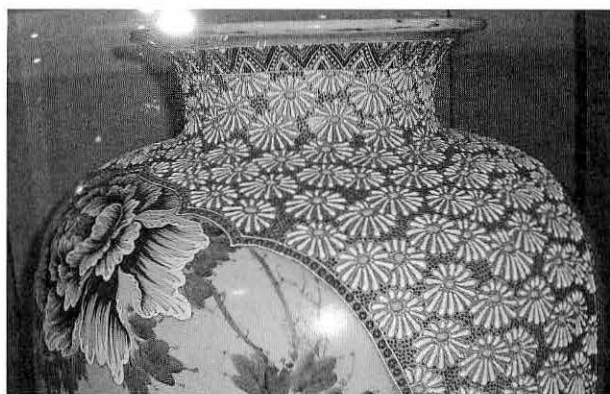


図 2

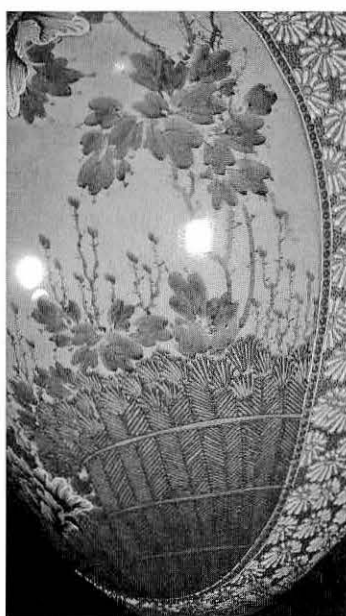


図 3

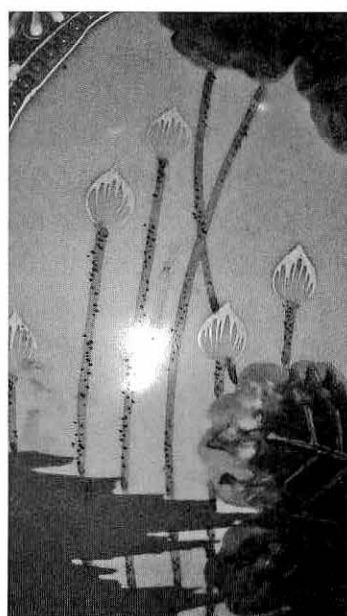


図 4

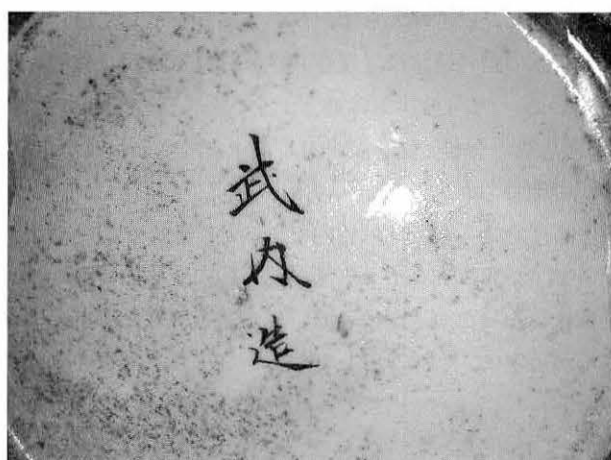


図 5

クを反映した微妙な色調で、やはり透明感があって、絵に奥行きを与えている。(図4) いずれの間取りも、2本の平行する細幅の金属線で囲まれているが、その金属線の間の地は灰色で、紺色の連珠文で埋められている。

この花瓶で注目すべきは、底に書かれた銘である。そこには朱色で「武内造」と記されている。(図5)

‘たけうち’という姓を名乗る工人は、名古屋市立博物館が調査した明治期の七宝工総覧では6名存在し、その一人竹内善十郎は武内善十郎とも表記されていたとしている。竹内善十郎は、愛知県の七宝の生産地として知られていた海東郡篠田村では1877年に、同じく海東郡遠島村で1878年に居住し、1877年(明治10年)の第1回内国勲業博覧会に5点の作品を出品している。また翌1878年には名古屋博覧会に額を2点出展している。そのうちの一つの花籠を描いた作品に武内善十郎の銘が残されている⁸⁾。

一方、遠島を代表する七宝焼窯元‘林小傳治家の4代目林庫吉(明治37年生)が纏めた『七宝史資料』を基にした『七宝資料集：林小傳治家文書二』の18、愛知県人物誌(二冊 明治11年及12年下巻 栗田東平編)の七宝工ノ部には、武内忠兵衛 磁器七宝 ナゴヤ藪下新道通二住スと記されている⁹⁾。この住所は前出の名古屋市立博物館が編纂した七宝工総覧の竹内忠兵衛の住所とほぼ一致する。ほぼというのは、七宝工総覧では、竹内忠兵衛の1878-79年(明治11年-12年)の住所に関する記述がなく、1877年に新道藪下町、1881年、1890年、1895年に新道町に居住したと記されているからである。しかし明治10年にあたる1877年から1895年まで新道藪下に居住していたとすれば、そこに居住していた竹内忠兵衛は愛知県人物誌に記されている武内忠兵衛と同一人物と考えるのが妥当であろう。すなわち‘たけ’を‘竹’と‘武’のいずれの漢字でも表記していたと考えられる。前出の竹内(武内)善十郎と同様であろう。

武内(竹内)忠兵衛は、第1回内国勲業博覧会、翌年1878年(明治11年)の名古屋博覧会に多数の作品を出展している¹⁰⁾。武内(竹内)忠兵衛は、竹内(武内)善十郎と共に七寶会社の工人であったが、出展数からみても善十郎をはるかに上回り、その人気は善十郎を超えるものであったと考えられる。愛知県人物誌は、彼の得意とする分野が陶器七宝であると記している。陶器七宝は陶胎七宝を示している。第1回内国勲業博覧会において、七寶会社工人の竹内忠兵衛は、陶器に七宝を施す技法は近年に発明されたにも関わらず、高い完成度を示していると高く評価されている。

またギョクチェン家の花瓶の銘の筆跡は、現在残されている武内(竹内)忠兵衛の作品に残された銘の幾つかと近似している。竹内忠兵衛は通常、‘大日本製造 七寶会社 工人竹内忠兵衛’、‘大日本 開洋社 竹内忠兵衛’などと銘を記すが、書体には幾分相違がある。平成21年に七宝町七宝焼アートヴィレッジで開催された特別展「明治の七宝：陶磁胎七宝」カタログ5, 6, 10, 11の武内(竹内)忠兵衛の作品に記せられた銘は竹内であるが、その‘内’の筆跡はギョクチェン家の花瓶の筆跡に非常に近い¹¹⁾。なおギョクチェン家の銘‘武内造’の‘造’は、上記展覧会カタログで、竹内のものには見られなかったが、やはり同時代に名を馳せた原不二夫が‘原不二夫造’としている他、数人の七宝工が苗字に‘造’を付している。おそらく製造の省略形として‘造’を使う習慣があったと考えられる。

結語にかえて

ギョクチェン家の大谷光瑞師から贈呈された花瓶は、文様装飾の観点からは、小菊の整然とした充填文、生垣牡丹や蓮池の巧みな絵画的描写、それらの背景にみられる七宝特有な半透明で繊細な色調などから、おそらく明治初期の七宝技術が熟達した時期の作品で、また底に記された銘文から武内（竹内）忠兵衛、または彼の作風の忠実な継承者の作と考えられるが、今後は武内（竹内）忠兵衛の作品との技術的観点からの比較分析が必須であろう。

武内（竹内）忠兵衛は、明治10年代の著名な七宝工で、国内のみでなく海外にも作品が存在する。1876年のフィラデルフィア万国博覧会にも出展し、またオースト応用美術館には1878年（明治11年）製作の磁胎七宝草花文花瓶が所蔵されている。

ギョクチェン家の陶胎七宝花瓶は全体の印象としては、精緻な印象は受けないが、間取りの牡丹や蓮池は勢いがある見事な描写であり、派手な装飾法に重点が置かれており、外国向けの大型七宝花瓶と考えられる。当時トルコでは日本商館などをおして、日本の陶磁器や七宝が知られており、評判も高かった。このような状況のなかで大谷光瑞師の贈答品は商品としてのそれらより格の高いものが選ばれたことは想像に難くない。

文末になりましたが、七宝町役場、七宝町アートヴィレッジ課 小林弘昌氏そして清水三年坂美術館の村田理如館長から助言頂きましたことに感謝の意を表します。

注

- 1) 片山章雄編「予会々々英国倫敦に在り：欧亜往還 西本願寺留学生・大谷探検隊の100年」, p.54, 大谷記念館, 2004。
- 2) '地中海遊記' 「大谷光瑞全集」9巻, pp.498-502, 大乘社, 1935。
- 3) 前掲書, pp.558-559。
- 4) 国立公文書館アジア歴史資料センター Ref.no 09041286500, 昭和2年3月28日付 外務大臣幣原喜三郎宛の小幡西吉在トルコ全権大使による報告書。
- 5) Gökçen, Şüküfe, Manolya ağacın kökleri, 2005, Bursa.
- 6) '鵬遊記', 大谷光瑞, 「大谷光瑞全集」第9巻, p.441, 大乘社, 1935。
- 7) '鵬遊記', 大谷光瑞, 「大谷光瑞全集」第9巻, p.439, 大乘社, 1935。
- 8) 「名古屋市立博物館 調査報告Ⅲ：明治期博覧会出品七宝工総覧」, pp.47-48, 名古屋市立博物館, 1996。
- 9) 「七宝資料集 林小傳治家文書二」p.41, 七宝町七宝焼アートヴィレッジ, 2009。
- 10) 「特別展明治の七宝：陶磁胎七宝」カタログ, pp.36-38, 七宝町七宝焼アートヴィレッジ, 2009。
- 11) 前掲カタログ, 図版参照。